

SOPHIA の意味

——プラトンの場合——

カミュの『シジフの神話』以来、わが国でもギリシア神話のシーシュポスはかなりなじみの人物になったように思われるが、しかしギリシア語で綴れば、*Sisyphos*（フランス語では *Sisyphé*）となるその名前のうちに、*sophos* という語が含まれていることは、まだあまり知られていないのではないだろうか。

「ソポス」は言うまでもなく「知恵のある、賢い」を意味するギリシア語の形容詞であり、時にはまた「知者、賢者」の意味で使われることもあるが、「*Sisyphos*」という名前は元来が *sophos* であり、前綴の *si-* が加わったために語幹母音に変化がおきて *sophos* が *syphos* となったのであって、「シーシュポス」とは「非常に賢い者、大変な知者」を意味する語である。

こうした立派な名前のこの人物は臨終の際に妻のメロペーに葬儀一切の禁止命令をあたえた。遺言に忠実な妻は葬儀を行わなか

った。ところが死んだ彼はあの世の王者ハイデースに妻の非情を訴え、地上に帰って妻を責めたててから、あらためて戻って来ると約束し、その許可を取りつけた。だが、その約束を無視して彼はそのまま地上に居すわり長生きした。もともと、再び死んだ時には罰が待ちかまえていて、坂の上がった頂上に大きな石をおし上げ、そのたびごとに転がり落ちるその石をまたおし上げるという反復行動、無限に繰り返される無意味な行動に努めなければならなくなったことは言うまでもないことである。

日本語にも悪知恵という語もあり、奸知や狡知という言葉もある。知恵者と言っても、かならずしもいい意味に使われるとは限らず、油断のならぬ人物を指す場合もあるように思われるが、確かに神話のシーシュポスも油断のならぬ狡知にたけた人物にちがいないが、しかし、彼を「知者」たらしめているその知、ある

齋藤 忍 随

いは知恵とはどういう性質のものなのだろうか。死は言うまでもなく、人間にとってこの上もない難局であり、その死から脱れて生き返るとなると、これはもう常人には不可能な難事であろう。したがって死の場面を切り抜けることのできたシーシュポスは、いかなる難局をも巧みに処理することのできる異常な能力の持主ということになるだろうし、彼が所有している筈の知、あるいは知恵とはそうした能力だということになりそうである。

ところでギリシア語の知や知恵を問題にする場合、もう一つ取り上げてもよいのではないかと思われる人名がある。それは周知の悲劇詩人ソポクレースである。Sophokles³ という名前のなかには明らかに "sophos" という語が含まれているのである。人はこの名前から大悲劇詩人としての彼が人間や人生の真実を知りぬいていたという意味での知や知恵をあるいは連想したりするかもしれないが、実は彼の父親の名前が "Sophilos" であって、ソポクレースという名前は父親の名前に因んだものであることは、まづ確実と見てよく、しかもこの父親ソピロス⁴ は悲劇の創作とは全く無関係の武器製造業者であった。したがってソポクレースという名前のそもその由来も、むしろ父親と密接な関係にある鍛冶という手職、技術にあったのではないかと思われるのである。そして事実、ギリシア語の用例に当たって見ると、例えばソポクレースの先輩悲劇詩人アイスキュロスの『縛られたるプロメテウス』ではプロメテウスは時に "Sophistes" と呼ばれたりして

いるが (944)、この語も単に奸知にたけた知恵者^{ソフィスタ}を意味するのではなくて、「一切の技術の教師」(110) という人類のために生活の便宜をはかったプロメテウスとの関聯で理解した方がよさそうに思えるのであって、もし、このこの語を「知恵者」と訳するとすれば「技術的知にたけたる者」となるのではあるまいか。

しかし、どちらかと言えば疑問のあるこうした用例よりも、「ソポス」と技術との関係をより確実に示してくれる例はほかにいくらかもあるのであって、例えばアイスキュロスと同時代の詩人ピンダロスの『ビューティア祭典競技祝勝歌第三歌』では、ネストールのような英雄の名が人びとの口の端に上るのは「巧みなる工匠たち (tektones sophoi) の組み立てた」(113) 詩歌によると歌われている(113)。「テクトネス・ソポイ」は複数形だが、その単数形は "tekon sophos" であり、「テコン」は普通に「工匠」を意味し、「ソポス」はこの場合、その形容詞になっている。そして「知のある工匠」と言えば、もちろん、その道、すなわち建築の技術について充分心得のある工匠、つまり「巧みなる工匠」ということになる。ただし、この場合の「テクトネス・ソポイ」は事実上、間接的・譬喩的な意味に使われていて、ホメーロスのような詩人たち、詩作という技に優れた人びとを指していることは疑いえないのである。

あるいはまたヘーロドトスの『歴史』ではメランプーシスは「有能な人物」(aner sophos) であって「予言術」をも修得したと

になっているが、予言術もギリシアでは一つの技術であり、メラ
ンブスはその術においても「ソポス」、すなわち有能であったの
である(II 9)。またソポクレースの『アンティゴネー』では、テ
イレシアースは「sophos mantis」、すなわち予言術にたける予言
者、「有能な予言者」である。

そればかりではない。槍をふるう野戦の將軍にも「ソポス」と
いう形容詞がつく。エウリーピデースの断片には「sophos strate-
lates」と用例があるが、それは「槍術の名手たる將軍」を意味す
る(Hf. 352)。船を巧みに操る「舵手」であれば、同様に「ソポス」
とどう語が加えられて、「kybernetes sophos」と呼ばれる(アイス
キュロス「救いを求める女たち」770)。名医ならば、医療に秀れた医
者ならば「iatros sophos」であり、また「巧みなる御者」は「har-
matelatas sophos」(ユンタロス「ピュネーティア祭典競技祝勝歌第五歌」
115)である。

さて、こうした用例はほかにもいくらでもあり、彫刻家の巨匠
ポリュクレイトスやペイディアース(いわゆるフィジ阿斯)も
「ソポス」と呼ばれているが(アリストテレス『ニコマコス倫理学』
1141a)、とにかく私がこれまで引いた前第五世紀の著作家たちの
用例から見ただけでも、「ソポス」という形容詞の元来の意味は、
一般にそれぞれの技、あるいは技術に精通熟達しているという意
味で、それについての知を所有している、というところになるが、
こうした事情はさらに古く溯っても確認することが出来る。

ただし、ホメーロスには「ソポス」の用例は全く見あたらない。
用例としてあるのはその名詞「ソピエー(=ソピアー)」だけであ
り、しかもその用例はただ一度のみだが、その「sophie(=sophia)」
は「熟練の船大工(tekton daemon)」が心得ている知識、すなわ
ち船を作る技術的知識であった(『イリアス』第十五巻412)。「古
注」はこの「ソピエー」を、「tekne」、すなわち「技術」とどう
語に置きかえて説明している。しかし、すでに述べたように、
「ソピエー」のホメーロスにおける使用は一回のみに限られてい
るので、この個所を後世の改訂、あるいは挿入と見なす者もい
る。あるいはそのとおりかもしれない。けれども、すくなくとも
『ホメーロスの讃歌』のうちの一篇、すなわちすくなくとも前第
六世紀の前半には成立していたと考えられる『ヘルメース讃歌』
では、アポロンが堅琴をかんで、ヘルメースが笛を吹く巧みな
技がやはり「ソピエー」と呼ばれていること(483, 511)は、無視
することができないように思われるのである。

ところで、このように「ソピアー」を一般に「技術」と理解し、
「ソポス」を「技術に巧みなる」とする用法が哲学以前の遙か昔
に由来し、一つの伝統を形成しているという事実は、すでにドイ
ツの古典学者ブルーノ・スネルによって指摘されてゐるが(Bruno
Snell, Die Ausdrücke für den Begriff des Wissens in der
vorplatonischen Philosophie, 1924; Der Weg zum Denken und
zur Wahrheit, 1978) 問題はこうした伝統とキリシム哲学と

く「philosophia」, “philosophos” という語を躍動的に使ったプラトンの哲学との関係であり、ここではまず初期の対話篇『プロタゴラス』を手がかりにして、この関係を探ってみよう。

この対話篇でのプロタゴラスはまずソフィストとしての自分の立場を神話的な物語に仮託して主張する。その物語はプロメーテウス神話の一種の啓蒙的改訂版と言ってよいものである。人類の最初の種族は他の最初の動物種族たちと同様に、大地の中で土や火などの混合物として造形された。だが神々によるその造形の仕事は一応終わったが、地上に生物として送り出されて生物となるためには、各種生物それぞれに特有の装備や能力を分配してやる必要がある、その仕事をプロメーテウスとエピメーテウスがうけもったが、分配にはもっぱらエピメーテウスが当り、最後の総点検だけはプロメーテウスが担当することになった。例えばある種の動物には強さの能力を与え別の種には速さの能力を与えた。小鳥のように強さの能力を与えられなかった動物はスピードの能力によって危険から逃げる事ができるのである。また寒暑から身を守るために、厚い毛とか、固い皮をまとわせたりもした。こうしたやり方でエピメーテウスの仕事はうまく行くかに見えたが、実は大きな手落ちがあった。人間だけはまだいわば裸同然で、無能力、無装備のままであったのに、能力の資源も、装備の資源もすでに使い尽くしていたのである。

そこで点検者でもあり、責任者でもあるプロメーテウスは技術

の女神アテーナーのところから「*the entekhnos sophia*」すなわち「技術的知」を、鍛冶の神ヘーパイストスのところから火を盗み出してこれを裸人間に与えた。もっとも二つとは言っても火を使用する技術を離れてはおよそ「*techné*」、すなわち「技術」は成り立たないのであるから実は一つなのだが、とにかく、こうして地上に「生きていくための技術」を獲得した。家や着物、履物や寝具も作った。大地から食物を得ることもできるようになった。

けれどもプロメーテウスによるこうした恩恵だけでは不十分であった。原始の人間たちにはまだ重大なものが欠けていた。それはポリスを、すなわち国家社会を形成し経営していくために必要な知という意味での「*the politiké sophia*」、または、「*the politiké techné*」、要するに「政治的知」と呼んでも、「政治的技術」と呼んでもよいものであった。それが欠けているために、人間は無力なくせに離散孤立の生活を続け、共同することができなかった。彼らは獣の恰好の餌食になった。たまに寄り集まることがあっても、たがいに不正行為をはたらきあい、結局は絶滅の危機に追いこまれた。この危機を救うためにはバラバラ人間を結集するための絆が必要であり、それに相当するのは「他者への畏敬の念」(「*aidos*」)と「他人を犯さぬという正義の心」(「*dike*」)の二つであった。この二つは主神ゼウスのもとに保管されていて、さすがのプロメーテウスも手を出しかねたのだが、ゼウスはその二つの放出にふみ切り、ヘルメースに命じて人類にもれなく分ち与えた。こ

の平等な分配はプロメテウスの技術分配とは異っていた。普通の技術の分配は少数の専門家がいれば、多数の者は素人で済むという分業的なものであったのである。

ところでプロタゴラスの長舌はさらに続く。彼の言う「政治的知」^{politikē gnōsis}あるいは「政治的技術」は具体的に分類すれば二つ、すなわち畏敬と正義の心であったが、彼は今度はその「知」、その「技術」を「aretē tektonikē」と対比的な関係にある「politikē aretē」という語に置きかえるが、ここで補足的説明を付け加えると、かりにこの二つのギリシア語を「技術的徳」、「政治的徳」と訳するにしても、徳と訳された「アレテ」は元来「すぐれた能力」を意味しており、倫理的な徳とは限らないのである。中国語の古い言い方にも例えば「天地の徳」などとあるが、地の徳と言えば万物を載せ、支える能力なのである。

だが、それはとにかくとしてプロタゴラスは、この「政治的徳」をあらためて「sophrosynē」と「dikaiosynē」という二つの徳、すなわち節制と正義とに分類し、二つが平等にすべての人々に分ち与えられている民主主義的状况を力説する。アテーナイの議会で誰もが自由に発言できるのも、結局は誰もが政治的徳、能力を持っているからである。また、すくなくとも誰もが政治的徳を素質的には所有しているのであり、したがって、その徳についての教育は可能であり、事実、子供たちには両親や先生はもちろんのこと、乳母までもが教えているのである。いわば社会全体が教えている

のだが、ソフィストたる者は、とりわけ人間をこうした徳についてすぐれた者にするのである。

さて、プロタゴラスのこうした神話的な文明社会の起源論はなかなか魅力的で現代にも通用しそうだが、その一つの弱点は、言うところの「政治的知」(321d6)、「政治的技術」(322a8)についてのあまりにも楽天的な考え方である。その楽天主義こそ民主主義なのだと言ってしまえば、それまでかもしれないが、彼本来の建前からしても、「技術的知」(321d1)よりも後に人間に付与されるのが「政治的知」であるからには、この知の修得の方が困難であって然るべきはずなのに、それが至極容易なことのように彼はまくし立てており、その点でソクラテスから、はたしてそのような知が教えられうるものなのか、という執拗な反論を浴びることになる。

だが、ここで注意すべきは、むしろプロタゴラスの言葉遣いの問題である。すでにこれまでの要約の中でも明らかにしているはずだが、彼の「知」という語は「技術」の同義語としてまず使用されており、その点は「ソピアー」の伝統的用法に忠実だと見てよいだろう。また伝統的な用法でも、「ソピアー」は造船術や笛、堅琴によって音色を作り出す音楽の術などさまざまであった。したがって「ソピアー」を、ものを作る普通の技術と国や社会を作る技術、すなわち「政治的技術」に分類するプロタゴラスの用法もある意味では伝統的だと言ってよいだろう。だが、この「政治

的技術」の中から、「徳ド」という語を利用して節制や正義をも導出して来るとなると、これは明らかに伝統の新たな拡張、拡大である。この新しさがプロタゴラスその人に由来するか、否かはとにかくとして、問題はこの新しい用法、「アレテー」を一種の知、一種の技術的能力と見なす立場を、彼がどこまで明瞭に意識していたかという点である。

そして、この点になると彼は曖昧である。すでに述べたように彼は政治的知、技術、言いかえれば政治的徳の具体例として節制と正義をもちだすが、「敬虔」をも挙げたりしている (357d)。この敬虔の徳などは長広舌の間に偶然出て来たという印象を免れないように思えるが、ソクラテスとのやり取りの中で「勇氣ソビエ」や「知ソフィ」も徳であることを認めたりすることになる。そして正義の人であっても知恵のない人間がいると言ってみたりする (359e-360a)。あげくの果てには、無知ではあるが、勇氣だけは衆にすぐれた人間もいると口ばししたりするのであって (363b-c)、ここでは到底、政治的知が政治的徳であり、その徳が例えば正義や勇氣であるとする立場は成立するはずもなく、プロタゴラスは要するに重大な事柄について厳密な言葉遣いのできない俗論の徒になりさがるのである。

こうしたプロタゴラスに比べてソクラテスはあくまでも厳密である。もしプロタゴラスの主張の中に出て来たように、政治的知が具体的に節制、正義、敬虔、勇氣、知 (知慧) の五つであると

すれば、そしてそのおのおのが一種の技術的能力であるとすれば、どういうことになるか。ソクラテスは徳が「機能」であり、技術的能力であり、したがってまた知であり、知恵であるとする立場を取って、容易には譲らない構えである。徳はかりに五つに分れるにしても、ソクラテスにとっては、例えば勇氣とは「恐るべきこと、恐るべからざることの知ソフィ」であり (363c)、反対に臆病とは、恐るべきものと恐るべからざるものを取り違えたりして、恐るべからざることに立ち向かおうとしない「無知」なのである。そして、このようにして知以外の四つの徳はいずれも第五番に挙げられた知に還元されることになるのである。

人がもしソクラテスの「徳なるものが一般に知ソフィ」識であることは明らかである (363e) という総括的な言葉に突然出会って、そのあまりの主知主義ぶりに驚き、あきれるとすれば、それは主としてソクラテスの言葉遣い、結局は知を技術と見なす一貫した立場を見おとすからである。例えば医療は人体とはいかなる構造のものかということについての知識である。あるいは健康とはいかなるものかについての知識であるが、ただそれだけではない。患者のくずれ去った健康状態を回復し、もとの健康状態を作りだす働き、能力が医療である。同様に勇氣の徳は、勇氣とは何であるかということについての知識であると同時に、人間の行為をその勇氣の型にはめて勇氣ある行為に形成する機能、能力である。その知は力なのである。一般に知を作り、形成する力と見なすこ

の立場は、すでに述べたように「ソポス」や「ソピアー」の用例の中に伝統として哲学以前に確立されていたが、ソクラテスはプロタゴラスとは異って首尾一貫、意識的にそれに忠実であろうとしている。そのため、新たに勇氣や節制、正義という徳の場面にまで「ソピアー」を拡大しようとする場合にも、ソクラテスには曖昧さも混乱もなかった。その意味で、もしこの新たな拡大をギリシア哲学における一つの革命と呼ぶとすれば、眞の革命者はソフィストでもプロタゴラスでもなく、ソクラテスということになる。そして今の私にはソクラテスとプラトンに区別を設ける関心はないので、このソクラテスをプラトンという名前に置きかえても、一向にさしつかえはないのである。

プラトンは周知のように「勇氣とは何であるか」、「節制とは何であるか」、「正義とは何であるか」というような問いから出発し、そうした問いを続けながらイデア論の哲学を展開するにいたった。だが最近の研究では、さらに晩年にまで続くプラトンの哲学の発展全体に異議を申し立てて、その発展を切断しようとする見方が一つの流行のようになっていた。研究者は例えば『パルメニデス』や『テアイテトス』、あるいは『ソピステス』を盾に取って後期のプラトン哲学を論理学者とか、感覚を重視する知識論者にしたて上げようとしている。しかし、私としてはそのほかならぬ後期著作の『テアイテトス』に次のような言葉からなる一節が含まれているのを見すごすわけにはいかないのである。

²philosophos² (知を愛し求める者) は「正そのものと不正そのものとの両者について、そのそれぞれが何であるか、両者それぞれが他のすべてと異なる点は何であるか、またその両者が相互に異なる点は何であるか」を考察する者である (176b2~c3)。

ピロソポスたる者は「できる限り早くこの世からあの世へと逃亡するように試みなければならぬ」(176a8~b1)。つまり、この言葉にしたがえば²philosophia² (知の愛求) とは「種の「逃亡」」ということになるが、「その逃亡」とはできる限り神に似ることである。そして神に似るとは、知をそなえた正しい、敬虔な人間になることである。……神は断じて不正なる者ではなく、最大限に正しき者なのである。したがって、我々人間のうちで可能な限り正しくなる者にもまさる神に近いものはありえないのである」(176b2~c3)。

(ざいとう・にんずい、ギリシア哲学、東京大学名誉教授)